

## インドと私（その1）

田中裕子（5組）

### 始めはヒマラヤから

東京都の区立中学校教師として勤務して4年半後、父が他界し、これを機に以前から考えていたインド行きのための退職を決意しました。まず始めは、先輩の先生から勧められヒマラヤのトレッキングに挑戦。ネパールの山の中は当然ながら東京の文明生活とはかけ離れ過ぎていて、あるのはただひたすら白くカッと高い山だけ。美味しかったのは甘い紅茶ぐらいなのに、何故かまた行きたくなり、これを“ネパール病”というのだと旅行社の人に言われました。



山道を歩きながら見聞きするすべてが興味深いことばかり。休憩させてもらった学校では、雨季が来るまでに仕上げなければと村の男性総出で学校の屋根工事をしていたこと。（ネパールの学校については、当HPで中野（水野）和子さん(10組)にも書いていただきました）

チベット人難民の村では、2回目に行った時、私のことを覚えていてくれ、その村で泊まり難民になった経緯などを聞いたのですが、何年か後に自分がチベット難民と結婚するとは思いませんでした。

中でも最も印象に残ったのは、5300メートルの峠に登った時、雪の降る峠の麓でテントに滞在し、チベット仏教のお坊さんが一人、ほとんど1日中お経を唱えているのを見たことでした。そこは村とさえ言えない、他にほとんど誰も住んでいないところで、食料を手に入れる店などももちろんありません。

子供の頃、本で読んだ岩山の上にある、死んだ人が生き返るといふ神秘的なチベット寺院のイメージと重なり、仏教とチベットについて勉強することを決心しました。

### ヒマラヤからインドへ

東京のチベット亡命政府代表部のペマギャルポ氏からもらった紹介状を頼りに、デリーからひどいオンボロバスで14時間、ダライ・ラマの亡命先のダラムサラの山村に到着。亡命政府の図書館で、無料でチベット語と仏教の授業が受けられることになりました。

1ヶ月ほど経った頃、チベット人の友達の女の子の家で、巨大な絹布製のチベット仏教画を見せてもらい、その迫力に圧倒され、無理に頼み込んで制作の修行を開始。

制作は技術的には難しくはなかったものの、表からは分からない様に2ミリくらいの針

目でひたすら縫い続けるというおそろしく根気のいる仕事です。

そこは難民の家、トイレもなく、出してもらおうお茶も飲まないでいたら、日本の女の子はすごい、お茶を飲む暇も惜しんで縫っていると褒められてしまうことに。

また、当時図書館の経典部門の主任をしていた今の夫からチベット仏教を教わっていた時、物には実態がないことの説明の例が新鮮で面白かったこと。

まるごと売っているチキンを料理する時、この鶏は私たちに食べられるために殺されたのだから、全部食べてあげなければ可哀想だと夫が言ったことなどチベット人の考え方とその社会の持つものに感動し、それが動機で結婚することを決めました。

当時の夫の月収は日本円でなんと 600 円くらいでした。

その後、結婚の手続き中に夫がサールナートのチベット大学でインドの国家公務員となり、月収は 1,500 円くらいに増えました。

夫の今の月収は 30 万円くらいで、それも言わないと片手落ちだと言っています。



田中さんの夫、チャムパ・サムテン博士（哲学）の講義風景、30 年前

(2023 年 11 月 1 日記)

以上